

3 授業づくり

児童生徒の実態を踏まえた教材研究に努める

「『授業』という仕事は、教師という一人の人間が、気力、体力、知識、想像力のすべてをふりしぼって出し、そのすべてを投げかけて子どもたちと対決し、子どもたちの中にあるものを、時にはないものまでも、無理にでも引きずり出していく激しい作業なのである。」（『齋藤喜博全集』第9巻 209頁）

授業の厳しさを求める齋藤喜博の言葉です。授業は、児童生徒と教師、教師と児童生徒の集団で織り成される真剣勝負です。そのためには、授業の目標やねらいを達成するための教師自らの課題意識や準備が必要です。

< 例えば >

・指導内容をしっかり理解し分析して、一人一人の思考や集団思考が高まる発問をしていますか。

教師の発問と児童生徒の発言には、間合いが必要です。教師が話し過ぎると、それに反比例するように授業中での児童生徒の発言は減ってしまいます。教師が児童生徒の実態に応じた教材を用意し、鋭く発問することによって、児童生徒の発言は増し、一人一人の思考や集団思考も深まっていきます。自分の授業を録音し、無駄な発問はないか、発問が増えてしまう原因は何かということを考えてみましょう。

・教科指導ノートを作り、指導略案や板書計画を考えていますか。

日々の授業は、意図的・計画的な営みの積み重ねが大切です。週案をもとに最低一週間の授業計画を立てたいものです。本時のねらい、主な学習活動、主な教材教具等を指導ノートに明らかにしておく、授業の流れを組み立てることができ、指導に自信がもてます。

また、指導の流れを構成できないときは、板書をまず先に考えてみるとよいでしょう。そこから授業の流れを組み立てることができます。板書事項は、授業のねらい、授業内容の中心事項、そして、黒板の面積で考えていきましょう。

さらに、時には指導ノートをもとに指導略案を書き、校長、教頭、他の先輩教師等に授業を自主公開し、授業の厳しさ、難しさ、そして、楽しさ、充実感を実感してください。指導略案をもとに最低月1回は自主公開授業を行いたいものです。

・「読む」、「書く」、「話す・聞く」の3要素は授業の基本です。

例えば国語なら、音読し、大切なことをノートに書き、それをもとに話し合い、聞き合う。そして、再構築された考えをノートに書き、まとめ読みして終わる。これは、国語だけでなく、社会や算数、理科等でも同じです。授業のどこに3要素を配置して授業を構成していくかは教材研究が必要ですが、まず、1時間の授業の中で、児童生徒はどこを読み、どこを書き、どこで話し、聞き合うかを考えてみましょう。

・授業研究会が印象批評で終わっていませんか。

「先生と児童生徒が一体となって、本当によい授業でした。」「児童生徒の活動が活発で、日頃の学級経営がしのばれます。」等、授業研究会が印象批評で終わっていませんか。「一体となっていた。」というなら、どの場面で「一体となっていた。」のかを事実と記録をもとに論議する必要があります。また、「児童生徒の活動が活発だ。」というなら、目標とかかわってどの場面の活動が活発であったのか、そして、その活動が本時のねらいにせまるものであったのかを論じ合わなければなりません。

授業研究会では、授業の内容や活動に基づき、研究会の意図に則し、課題を解決していこうとする教師自らの学ぶ意欲が必要です。「見る・検討する・分析する・討論する」の4視点を常にもって授業研究会に臨んでみましょう。また、その会の中で、授業にかかわって日頃感じている疑問点や課題について先輩の教師に尋ね、自分の実践に生かしましょう。

「よい授業は、教師が生身の人間としての教材解釈を持ち、方法プランをもっており、それを生身の人間である子どもと授業のなかで激突させ、そのなかで自分の解釈も方法も変更していくような質の授業だった。」

斉藤喜博（斉藤喜博全集6 国土社）

子どもの活動や体験を重視する教育が叫ばれている。熱心な取り組みをしておられる先生方の授業を参観して、時々思うことは、子どもの活動は目立つが、授業の中で教師と子どもとが向き合い、じっくりと学習内容を学び合うという光景が乏しいように感じる。

授業者の教材に対する思いや主張を子どもにぶつけ、多様に変化し発展する授業をつくりあげるために、授業者は教材を十分に読み込み、教師や子どもの「人間の豊かさ」を授業の基盤に据えながら、創造の生まれる授業を忘れてはならない。

東部教育事務所長 木下法広(Tobu通信平成13年11月5日より)

学習理解のための学習習慣を育てる

よい学習規律や学習習慣が身につくと、児童生徒の集中力が高まり、個人や学級集団の学習意欲も育ってきます。学年の発達段階に応じた『学びの姿』を念頭におき、日々根気よく指導していくことが大切です。「少くくらい学習態度が悪くても教えた内容が理解できていたらいいじゃないか。」といった指導者の気のゆるみは禁物です。きちんとした学習態度は、真摯な学習姿勢に直結しているのです。教師自らの課題意識や準備が必要です。

< 例えば >

・学習中のきまりや学習の方法を具体的に示していますか。

いすの座り方、学習用具の準備や使い方、発表・聞き方、机上整理、特別教室など教室以外の場所での学習方法等について、児童生徒にわかりやすく説明し、身につくまで指導し続けることが大切です。「きちんと座りましょう。」「しっかり聞きましょう。」より、「背筋を伸ばして座りましょう。」「動かないで聞きましょう。」のように、『求める姿』を具体的に伝えると児童生徒は行動に移しやすくなります。

・学級の実態に応じて方法を工夫し、学習のルールやきまりを設定していますか。

学級の実態はさまざまです。もし、その学年までに身につけておくべき学習のルールやきまりが身につけていなかったら、すぐに指導を始めましょう。指導方法は、その学級に定着させやすい独自の方法でかまいません。しかし、「自分の作業を続けながらでも、とにかく人の発表に耳を傾けていればそれでいい。」というような考えは、他の集団や場では通用しないことがあります。どこでも生かせる学習のルールを設定しましょう。

・学習のめあて、達成のめやす、目標時間などを吟味し、設定していますか。

何のためにこの学習をするのか、何をめざすのかといった学習のめあてを毎時間明らかにすることが、学習規律の維持に有効です。めあてのあいまいな見通しのもてない学習が続くと学習規律は崩れていき、新しい習慣も身につけません。「今日のめあては、直角三角形が自分でかけることです。」「この学習では.....まで到達できたらよいですよ。」「この内容は、一生懸命やれば 分間でできますよ。」「時 分までにやっちゃいましょう。」というような投げかけをすることも、限られた学習時間でやり抜こう、がんばり抜こうという態度や気持ちを育てていく一つの方法でしょう。（個人差を十分に配慮した支援を心がけましょう。）

共に高まり合う学習集団をつくる

人間関係づくりや小集団づくり、学級の秩序づくりなどを行うことによって、望ましい学級集団ができます。その集団を基盤にして、個々の体験や経験等の違う児童生徒一人一人の個性を生かしながら、学習の中で応答し合う関係が高められ、児童生徒が「わかった。できてよかった。」という授業となる学習集団がつけられていくことが大切です。

< 例えば >

・対面する関係から始めましょう。

授業は、児童生徒、教師がお互いに話せる、聞けるということから始まります。話す人の顔や口を見て聞く、相手に対して語りかける、表情豊かに身振りをつけて話すというように、学習の内容を通して、お互いが対面できるようになることが授業成立の第一条件です。

例えば、小学校低学年では、「話す人におへそを向けて聞こうね。」「話す人は、一番遠くの人にわかるような声で話そうね。」といったことを教師が確認しながら授業を進めましょう。また、中学年になれば、「ノートを取ることや作業をやめて友だちの発言を静かに聞こうね。」「話す順番を考えて話そうね。」といった指導を繰り返していくことが大切です。中学校では、内容を把握するように聞いたり、相手を意識して要点をまとめて話したりできるようにし、うなずいたり、大切なことをメモしたりしながら対面できる指導を心がけたいものです。

・児童生徒同士が「わからない」と言える人間関係づくりに努めましょう。

「わかった。」「わからない。」を児童生徒同士で言えたり、「わからないから、もう一度言ってください。」「わからないから、もう少し時間をください。」ということが学習中に言える関係ができていますか。このような発言が出ることは、児童生徒の学習意欲が高まっている証拠です。発言した児童生徒を評価しながら、どこがどのようにわからないのか、どこをどう説明してほしいかなどをはっきりさせながら授業を進めていけば、学習内容の広がりや深まりが期待できます。

教師が児童生徒の立場になって「わからない。」を発したり、机間指導の時に気づいた「学習内容を深めることにつながる児童のノートや発言」を紹介することも、学習集団を高めることにつながります。

・「接続詞」でかかわり合う関係になっていますか。

「わからない。」が言える学習集団に高まってくると、さらに授業内容の理解や解釈の違いを、集団思考の中で高めることができるようにすることが、次のステップです。そのためには、教師が「そのわけは?」「もっと詳しく」「だから、　　なの?」「でも、しかし?」といった「接続詞」で児童生徒の発言や活動にかかわり合いながら、学習内容の解釈や理解の仕方の違いを解決できるようにしていくことが必要です。「共通の意見をまとめる。」「反対意見を明確にする。」「同質の意見、解釈について揺さぶりをかける。」「教師の教材解釈を提示する。」等のさまざまな手だてを加えながら、児童生徒が「接続詞」でつながる授業にしていくと、さらに個や集団の思考が高まっていきます。